

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第14回

森の彫刻家 上床利秋

マイナス5℃の制作会

1月12、13、14日は今季猛烈な寒波が訪れた。

杉アトリエのある溝辺の森の中も5℃とラジオがニュースで語っていた。

そんな中、素手で冷たい粘土をつかんでの彫刻制作は、やはり厳しいものがある。

にもかかわらず、アトリエの講座生たちは制作が面白いらしく、黙々と制作に集中しておられる。

相手にされなくなった居候猫は散歩に出かけていなくなる。昨年冬から設置した大きなビニールカーテンでアトリエ鉄骨周辺を囲んでおり、手製の改造薪ストーブに火をつける。かねてならばそれだけで暖かさは十分だけれども、流石にそれだけでは我慢できずに自宅で使わなくなった灯油ストーブを三台持ち込んでの制作会になった。

立体として美術を表現すること自体、実に楽しいものである。ギリシャ時代から遺っている作品を見ても、実に意義深い生活を送っていただろうことが偲ばれる。畑仕事の合間に大理石を刻んでいたという本を思い出した。

しかし、現代に立体表現を楽しむ人が少ないのは何故なのか？それは場所、時間、体力など、平面表現よりも様々な制約があるからだ。

だからといって、この表現分野が無くなることはないような気がする。

まるで登山や鉄人レースを趣味で続ける人が後を絶たないようなものなのかもしれない。

逆に環境が厳しい時ほど、同じ場所に集まって共に制作することが楽しく思えることもある。

一人で集中していい作品が作れた時ほど充実感が満たされる。でも、そうでなくても、同じ趣味の同志でお茶している時も、またいい。



杉アトリエでは、厚さ3センチの氷が張った。



杉アトリエ制作風景
ビニールの発明されていない時代、ロタンは粘土が凍らないように夜、注意を払っていたが、それは奥さんのローズ・ブーレの仕事だったという。